

【クレーム情報】

染色加工による脆化破損

染色加工に使った薬剤や、染色した染料自体が原因物質となって繊維を損傷させる事故がある。先月号では、硫化染料による綿の脆化破損を紹介したが、今回は染色加工時の薬剤などによる脆化破損の例を紹介する。

原因

染色加工で使用した薬品などにより、緑色のプリント柄部分の毛繊維が脆化したため、着用による摩擦などで繊維が脱落したものの。

事故の防止対策

染色加工において繊維を脆化させるような薬品を使用しないこと。

染色加工の方法

染色加工の方法には、染料液に布地を浸して染める浸染（しんぜん）法と白布あるいは浸染された染色布に部分的な染色を行なって模様を染める捺染法の二種類があり、今回紹介したニットシャツは、捺染法で柄を染色したもの。

捺染の技法

捺染の技法には、抜染法・防染法・直接捺染法などがあり、使用する薬剤によって繊維が脆化する事例が知られている。

●抜染法

抜染剤により化学的に分解して消色する染料（可抜染料）で染色した布に、抜染剤を含む捺染糊（染料を含む色糊）を印捺（型を用いて布に写す）した後、乾燥・蒸熱処理により、印捺された染色布の染料を分解させる。印捺された部分は白色あるいはそれに近い色になり、これによって布地に白抜きの模様を描いたり、別の色を着色したりする方法。抜染剤には、還元作用のある薬剤や酸化作用のある薬剤を使用する関係上、抜染部分の復色、繊維の脆化などの問題が発生することがある。

●防染法

布地に染料の染着を防止する処理を行った後、直接捺染などの方法で布地全体を染色し、染着防止部分を模様にする方法。

防染法には、防染剤として染料と化学的に反応する薬剤を用いて染着を防ぐ化学防染法と、物理的手段によって染料と繊維が接触しないようにして染着を防止する物理防染法がある。

ある。

●直接捺染法

最も一般的な捺染法で、白布または淡色の布地の上に、色数に応じた色糊を通常は淡色から濃色の順で印捺して模様を描く方法。

事故防止システムで検索

日本繊維製品・クリーニング協議会が運営する「クリーニング事故防止システム」での検索では、破損事故が233件、損傷事故が591件確認でき（10月3日現在）、このことから染色加工が原因となっている事例を7件探し出すことができる（検索システムでは原因を「染色助剂」としている）。先月号で紹介した硫化染料での脆化破損と同様、染色加工が原因で衣類が傷むなど、消費者には想像のつかないことである。

特定の色や柄が破れたり消失したりする現象が発生したときには、染色加工による脆化の可能性を顧客に伝え、メーカーに確認するなどの対応が必要となる。

事故防止システムの利用には、日本繊維製品・クリーニング協議会への入会が必要です。詳細は、日本繊維製品・クリーニング協議会事務局にお問い合わせください。

TEL. 03(5362)7201



えんじ色に、緑色の柄模様。
よく見ると、衿周りなどのよく擦れる箇所で、
なおかつ、柄部分の繊維だけが無くなっている。

■品 名…ニットシャツ

■素 材…毛 100%

■取扱い絵表示…



■処 理 方 法…石油系ドライクリーニング、タンブラー乾燥、
スチームアイロン仕上げ

■事故の状態…衿部分の緑色にプリント染色された柄の一部が、
擦れたように消失している。
他の部位を見ても、緑色のプリント部分は全体
に脆化が生じている。